

ドイツにおける資本主義転化論と日本への影響

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学社会科学研究所 公開日: 2013-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柳澤, 治 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/15542

ドイツにおける資本主義転化論と日本への影響

柳 澤 治

今年度（2001年度）は第1次大戦後のドイツにおける資本主義経済の変質と転化に関する議論とナチスの経済思想との関連及び後者の日本への影響について検討した。ナチス経済思想の日本への影響については、とくにナチス党の綱領に示される諸思想、なかでも「公益は私益に優先する」（*Gemeinnutz geht vor Eigennutz*）の重要性に注目し、この原則が戦前の日本において如何に認識され、批判ないし評価されていたか、また「経済新体制」をめぐる論議の中でこの原則が如何に取扱われたかを明らかにした。前者に関してはとくに我妻栄、加田哲二及び長守善のそれぞれの認識と評価、さらに当時の一大翻訳事業『新独逸国家大系』（全12巻）に関わる伍堂卓雄・松井春生の立場について、後者についてはとくに革新官僚美濃部洋次の認識についてそれぞれ分析した。

上記の研究の成果の一部は次のように発表された。①柳澤治「戦時期日本における経済倫理の問題（上）」『思想』第934号（2002年2月）。なお同上（下）は上記雑誌4月号に掲載予定である。②O. Yanagisawa, “Gemeinnutz geht vor Eigennutz” im Streit um die Neue Wirtschaftsordnung in Japan in der kritischen Zeit, in: R. Gömmel / M. A. Denzel (Hrsg.), *Weltwirtschaft und Wirtschaftsordnungen*” (Beihefte: Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte), Stuttgart, 2002 (Februar).

また社会経済史学会関東部会（2002年3月16日・早稲田大学）において「日本におけるナチス経済思想—公益優先論をめぐって—」を論題として研究報告を行う予定であるが、これも本個人研究に基づくものである。